
悪魔でもバスガイド

キオナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔でもバスガイド

【Nコード】

N6455Y

【作者名】

キオナ

【あらすじ】

引き籠りがちで人と接するのが苦手な少年、しじまぐろの降魔黒乃。

そんな彼の唯一の心の支えは人気カードゲームの萌えキャラクターであり脳内彼女であるフィンディとのラブラブ生活を妄想する事だった。

いつも通り自宅で一人彼が部屋で妄想をしていると玄関のチャイムが鳴る。

人と接したくない彼は当然無視するが、次第にチャイムの鳴るペー
スが早くなりドアノブが何回も回される。

それでも彼が無視していると、無理矢理玄関のドアが破壊され誰かが入って来た。

黒乃は怯えて布団の中に隠れフィンディに助けてを求める。
遂に黒乃の部屋の扉が開き、誰かが黒乃の布団を剥ぎ取った。

黒乃が恐る恐る侵入者の正体を確認すると、そこにいたのは実在しない筈のフィンディが笑顔で立っていた。

フィンディが語るには黒乃を地獄のバスツアーに参加させる為に迎えに来たと言う。

(1 - 1)

「フィンディはやっぱりツインテールの方が似合ってるよ？あ、でも君ならどんな髪型でも可愛いよ？本当だって。」

少女のイラストが描かれた厚紙と楽しそうに会話しているこの少年の名前は降魔^{リクマクノ}黒乃。

彼はもう半年以上学校には行っておらず、人気カードゲームのキャラクターと愛し愛される妄想をしながら毎日を送っている。

彼は元々現実世界^{リアル}の女子も好きになれる普通の男の子だったのだが、好きだった女子が転校してしまい、それならばと何処へも行ったりしない2次元の女の子を愛する事に決めた。

彼が不登校になってしまったのは特に苛めや嫌がらせがなかったからでは無く、単純に脳内嫁との生活に嵌まって抜け出せなくなってしまうたからである。

因みに彼がフィンディと呼ぶのは茶髪でツインテールの女の子がバスガイドのコスプレをしているカードで、本来このカードの名前は“悪魔でもバスガイド”だ。

フィンディとは英語で悪魔のような人を意味する“Fiend”を元にして彼が名付けた名前で、この名前を考えるのに約1日も掛けた。

それから30分程経過した時だっただろうか、彼がフィンディに一方的な会話をしていると、自宅のチャイムが突然鳴り響いた。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

(1 - 2)

「誰だろっこんな時間に？ねえフィンディもそう思うよね？」

黒乃は普段から人と接するのは苦手なので家の電話やチャイムが鳴っても絶対に出る事は無い。

いつもは彼の母親が対応しているのだが今日は映画館へ外出中で不在だった。

母親が不在な事を知っていても勿論彼は無視に徹する。

彼は普通の高校生なら学校へ行っている時間帯なのにも関わらず自分が家にいるのは可笑しいと思われるのではないかと不安を抱いており、同時に人前で上手く会話出来ないのではないかという不安も抱いている。

訪問者は誰も出ない事に対して腹を立てているのかチャイムを押す間隔が速くなりドアノブを激しく動かして耳障りな音を立て始めた。しかしそれでも無視をしてフィンディとの妄想に浸っていると訪問者は諦めたのか急に降魔家は静まり帰るが、その直後玄関のドアが吹き飛ばされ誰かが笑い声を挙げながら家に侵入した。

侵入者の笑い声は女性であり、その不気味な笑い声と共に足音が黒乃の部屋へと近付いて来る。

黒乃は今まで味わった事の無い恐怖感に支配され、布団に包まってフィンディに助けを求めた。

遂に侵入者は黒乃の部屋へ辿り着き、扉を開けて小刻みに揺れている布団を見つけると突然毛布を掴み投げ捨てた。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

毛布を剥ぎ取られても尚、黒乃は目を閉じていたが数十分経っても侵入者からのコンタクトは無く聞こえて来たのはため息の様な音だけだった。

彼は何もされない事を逆に不気味に感じたが、このまま寝たふりをしているも解決がしないのは分かっていたので勇気を振り絞りゆっくりと重い目蓋を開いた。

暫らく目を閉じていた所為で霞んだ視界に映っているのは彼が大切になっているフィンディのカードを怪訝な表情で持っている少女だった。

自分の目に映る少女の姿を見て驚愕した彼は何度も確かめる様に目を擦って確認した後、無意識に一言呟く。

「本物の…フィンディ…!?!」

その言葉を聞いた少女は満足気に頷いて頬を赤らめた。

彼の言った通り、まるで最新の3D技術で投影されたのではないかと疑いたくなってしまう二次元の架空のキャラクターフィンディが椅子に座っていた。

彼女は骸骨の意匠が施された青いバスガイドの制服を着たやや赤みがかった茶髪のツインテールに大きな真紅の瞳…と明らかに現実世界^{リア}の人間ではない風貌だった。

この時黒乃の中にあつた恐怖心は既に消し飛んでおり、確かにそこに存在しているフィンディを色々な角度から疑望した後、投げ捨てられていた毛布を拾って布団の元へ行き再び包まって眠った。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

フィンディは再び布団に包まった黒乃を見るなり椅子からすくつと立ち上がり、今度は彼ごと毛布を掴んで投げ飛ばした。

投げ飛ばされた黒乃は部屋の窓ガラスを割って突き抜け、ベランダに転がった。

ベランダに飛ばされていた彼は暫らくの沈黙の後、毛布を被りながら地を這う様に自分の布団のある場所に帰ろうとしたが途中で力尽き気絶してしまった。

気絶してから約3時間後、黒乃は目を覚ました。

ふと窓の外を眺めると外は真っ暗になっており、窓ガラスも修復されていた。

やはり夢だったのかと彼は嬉しいのか悲しいのか判別し難い気持ちを抱きつつ左手を支えにして起きあがろうとした時、何か手に変な感触の物が当たっている事に気付いた。

まさかと思い彼が恐る恐る左を見るとフィンディが恥ずかしそうな表情をしながら隣で横になっていた。

「キャハ？黒乃さんって意外と大胆ですね？」

「ほ、本物だ…本物のフィンディ…それともこれは夢の中の夢…？」

未だに黒乃はフィンディが実体化している事を信じられず、彼女の頬を摘まんで伸ばしたり髪の毛の匂いを嗅いだりしたが最終的にはどう考えても夢や幻では無いという結論を出した。

彼は突然の来訪者に対してどう対応して良いか分からなかったので彼女を座布団の上に座らせてお茶と菓子を目の前に出した。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

(1 - 5)

しかしフィンディはそれに手を付けず、首を傾げて黒乃をじっと見つめている。

彼は気まずくなり一旦部屋を出て深呼吸をしてから戻るがやはりフィンディは動かず固まったままだった。

無論、彼女と話をしてみたいという気持ちは黒乃にはあるのだが普段カードにしか語りかけていない重度のコミュニケーション障害の少年にとっては高いハードルだった。

それでも彼は夢にまで見たフィンディがこの現実世界に現れるシチュエーションに胸を躍らせており、今直ぐにでも彼女を抱き締めた気分だった。

「ねえ黒乃さん何で黙ってるんですかぁ？いつもは可愛いよーとか大好きだよーとかフィンディちゃんマジ小悪魔ーとか言ってくれるのにい…」

何も言ってくれない黒乃を見かねたのか、彼女は日頃自分のカードに言われている台詞の内容をわざと強調して呟きながら彼に詰め寄った。

黒乃はまさか普段何気なくカードに対して言っている言葉がその本人に言われるのがこんなに恥ずかしいとは知らず、顔を真っ赤にして涙目になった。

「な、なんで…なんで知ってるんだよ…」

「キャハ？そんなのいつも一緒いるからに決まってるじゃないですかぁ？もー恥ずかしい事言わせないでくださいよー黒乃さん？」

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

動揺している黒乃に更に追い打ちをかける様に彼女はその後にも彼に言われた台詞を何回も言い続けた。

だが黒乃は遂にフィンディの言葉責めに耐えられなくなって部屋を飛び出し、玄関の扉を開けてそのまま走り去ろうとしていた彼だったが、家の前に停まっていた巨大な物体にぶつかり鼻血を噴き出して倒れた。

通れる筈の道が通れないとは一体何事かと彼は起き上がって前方を確認するとそこには真黒に染まった怪しいバスが停車していた。あまりにも可笑しい状況に黒乃が呆氣に取られて口を大きく開けたまま凝視していると、背後からフィンディがバスの前まで歩いて来てフラッグを小さく左右に振った。

「地獄のバスツアーへようこそ黒乃さん？」

「地獄の…バスツアー…！？ひええ！僕を殺す気だなこの悪魔！人でなし！」

「キャハ？その通りあたしは人じゃなくて悪魔ですよ？あ、でも大丈夫？大事な未来の旦那様を殺したりなんてしませんから♪」

黒乃は何故こんな事になってしまったのか原因を探る為今まで自分とフィンディが繰り広げた妄想会話を再生すると、3日前に彼女がガイドを務めるバスツアーへ行ってみたいと言っていたのを思い出した。

甲斐性が無い彼がそんな突拍子も無い事を言っていたのは、妄想の中ですら何を言っても構わないと思えたからであり、まさか本当に行く羽目になるのなら彼は絶対に言わなかっただろう。

>
i
3
5
3
1
0
—
4
3
7
1
<

(1 - 7)

だがそんな約束よりも今フィンディがとんでもない事を言った事に彼は自分の耳を疑った。

確かに彼女は彼に対して“未来の旦那様”と言ったからだ。

黒乃はいつも妄想で彼女に僕のお嫁さんになって等のアプローチをした事はあったが、彼女の口から自分を認める言葉が聞ける日が来るとは夢にも思わなかっただろう。

この会話だけなら彼は幸せ者なのだが、そもそも何故架空の存在であるフィンディが実体化して彼を迎えに来れたのが不明なままであった。

「ねえ、どうして君が現実にいるの？正直訳が分からないよ。」

「良い質問ですねえ黒乃さん？あなたが持っているあのカード、実はあたし——っと危にゃい危にゃいうっかり口を滑らせる所でした？ってな訳で内緒です、内緒？」

結局黒乃の最大の疑問は有耶無耶にされ闇に葬られた。

ただ一つ確信したのはそれを言おうとした時のフィンディの顔は強張っており、聞いてはならない真実であるのは間違い無い。

彼は前にかなり怪しいが死ぬ程愛しているフィンディ、後ろには安全だが平凡な家のどちらかを選ばなくてはいけない究極の選択に迷っていたが、善く善く考えてみれば家を選んだとしても先程の様に強行手段で家を破壊され連れて行かれるのは間違いなさそうなので彼女に言われるがまま大人しくバスに乗り込む選択をした。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

黒乃が乗り込んだバスの中には誰も乗車しておらず、運転手もいなかった。

立っていても仕様が無いので彼は一番前にある右の窓側の席に座り、頼杖を突いて外の景色を眺めているとエンジンの音も掛かっていないのに勝手にバスが動き始めた。

座っている彼の隣の席にフィンディが飲み物の入った紙コップを二つ持って座り、片方を彼に渡した。

それを受け取った彼が中身を覗くと異様に青い絵具の様な液体が入っていた。

「ちよっ…何なのこれ？どう見ても飲み物じゃ無いよねこのエイリアンの血液みたいなのだ。」

「キャハ？これは地獄名物の天使の生き血で〜す？あ、隠し味にいや〜ウフフ？」

天使の血は青いという事実にとっても残念な気持ちになった黒乃は無言で紙コップをフィンディに返した。

しかし実際は最初は透明だった炭酸飲料水に彼女が大量の惚れ薬を投入してただけで本当は天使の生き血や地球外生命体の血液でも何でも無くただの彼女の欲望の塊だった。

その後彼は自分の飲み物の色が彼女の物と違う事に気づき、冷めた態度でそれを指摘すると彼女は慌てて彼に普通の飲料水を渡した。

「そろそろ来ますので黒乃さん？ちゃんとシートベルト付けてくださいね？」

「来るって何が？誰か来るの？」
> i 3 5 3 1 0
— 4 3 7 1
<

フィンディが黒乃にシートベルトの着用を促すと、急にバスは道路より遙か上空に昇って辺り一面光に覆われたかと思うとバスの前に大きな赤い門が出現し、バスはそこの中へ吸い込まれるかの様に入って行った。

黒乃はこの時やっとシートベルトを着用する意味を理解したが、既に座席から落ちていたので意味は無いに等しい。

そんな彼を余所にフィンディは呑気に饅頭を食べながら謎の言語で書かれた雑誌を読んでいた。

「おい！それでも君はバスガイドかーっ！」

「キャハ？心配しなくても黒乃さんの分のお饅頭もご用意してありますから？はい、あーん？」

「あーん…じゃないよ！僕が言いたいの客の心配ぐらいして欲しいって話！」

彼女は黒乃をからかって面白そうに笑っていた。

黒乃はそんな彼女の態度が気に入らなかったのか自分の座席に戻り、隣に座っている彼女の方を見ない様に体を右に傾けて窓の外を眺めるとそこには美しい花々達が咲き誇っており、一般的な地獄のイメージとは掛け離れた光景だった。

興味津津になっている黒乃の肩にフィンディはもたれかかりながらこの場所の説明を始める。

「右手に見えますのはムーリトクスエ高原、ここは地獄に生息している全種類の花々が集まってまーす？左手に見えますのはリトクビ

「村々ここは人口約200人の小規模な集落ですが、シクレタイトという特殊な鉱石の加工技術を持った職人さんがいるのはこの村だけなんですよ〜?」

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

フィンディが説明を終えるとそれまで空中を浮遊していたバスは急降下し、近くの村付近へ着地した。

勿論何も教えて貰えなかった黒乃はまたも吹き飛ばされそうになったが、今度は彼女に息が出来ない程に抱き締められたので吹き飛ばされずに済んだ。

黒乃は行き過ぎた愛情表現をする彼女を無理矢理引き離そうとするが、知恵の輪の様に体を絡ませられて解けないので仕方無く彼女を不格好に抱えたままバスから降りた。

外に出ると2人の前に1人の若い女が跪いており、フィンディは黒乃から降りて不敵な笑みを浮かべながらそれを一瞥すると女が前へ歩み出て口を開く。

「ようこそ我が村へおいでくださいました姫さ——」

「は、早く案内してくれない！？あたしお腹空いちゃった！」

この時黒乃はフィンディが実は身分の高い者であることを隠していた事と話を逸らした事を問い質したい気持ちだったが、2人の会話に口を挟む勇気が無かった為叶わなかった。

女に案内されるがまま黒乃がフィンディと村へ足を踏み入れると、待ち構えていた村人達が手を振ったり拍手をして盛大に歓迎している。

村人に見送られながら3人は更に先へ進むと赤い看板が施された小さなレストランがあり、そこまで案内すると女はフィンディと黒乃にお辞儀をして去って行った。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

(1 - 1 1)

フィンディに手を引つ張られて黒乃はレストランの中へ入り、彼は入って直ぐの所にいる受付嬢を見るなり目を輝かせた。

実はその受付嬢は黒乃がフィンディ以外に溺愛している美少女キャラクターのカード“ ロロタル ”で、紫色の長い髪にオッドアイなのが特徴で黒乃は彼女をろつたと呼んでおり脳内設定では超ドS少女である。

「やっぱりカードで見るよりも可愛いなあろつたん… ああその細い足で踏まれてみたいなあ… えへ…」

「チツ… (あたしと会った時はあんな風にデレデレしなかったのに… あんな女の何が良いですか…)」

黒乃の態度を見て不機嫌になったフィンディは彼を足で踏み付けて痛がつている隙にその場から連れ去り奥の食堂へ向かった。

テーブルに着くと豪華そうな料理が次々と運ばれて来るが、そのどれもこれもが黒乃のいた世界では見た事が無い食材が使われており不安だったが、フィンディの様子を覗くと美味しそうに食べているので彼は戸惑い一つも口に運んだ。

「あれ？ 味があんまりしないなあこの料理…」

「あ、言い忘れてましたけど悪魔の味覚は人間よりも発達しているので料理も基本薄味なんですよお？ だから人間の黒乃さんのお口には合わないかもです？」

その後のフィンディの話によれば悪魔と人間は髪や瞳の色を除けば

外見は何も変わらないが味覚・嗅覚・視覚に関しては悪魔の方が発達しているらしい。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

(1 - 1 2)

味がしない所為で満腹感が得られない食事を済ませた黒乃はトイレに行くと言を付いてこつそり受付にいるロロタルに会いに行った。だが彼にはロロタルに話し掛ける勇氣は無く、遠目に見つめているだけの宛らストーカーの雰囲気醸し出していた為、他の客や店員から白い目で見られていたのは言うまでも無いだろう。

黒乃は諦めてテーブルに戻ろうと振り返ると背後には殺氣を纏ったフィンディが優しく微笑みながら立っていたので気付いていない振りをして歩こうとしたが、抵抗虚しく彼女に椅子に縛られた揚句心臓の前にフォークを突き立てられた。

「問題です？さつき黒乃さんは誰を見ていたんですかあ？1・あたし 2・フィンディ 3・マジ小悪魔…さあ何番ですかあ？もし不正解だったら黒乃さんは綺麗な赤に染まります？」

「じゃあ4番のメンヘラフィン——ってやめてやめて冗談だって冗談！本当にちよつと刺さってるって！真面目に答えるから殺さないですよ！」

「キャハ？どうせ黒乃さんは妄想の中で色んな女を誑かしてる変態さんですもんね？やっぱりお仕置きが必要みたいですよ？」

「ひいひい…この悪魔あ…」

その後黒乃は椅子に縛られたまま約1時間外の目立つ場所に放置された。

彼は通りかかった人々に助けを求めたが、フィンディが村人たちに助けてはいけなさと釘を刺していたので相手にされなかった。

>
 i
 3
 5
 3
 1
 0
 —
 4
 3
 7
 1
 <

(1 - 1 3)

お仕置きを受けた黒乃はフィンディに連れられて村の中でも一際目立つ大きな家に訪れ、彼女が家のドアをノックすると中から厳格そうな老人が顔を出して2人を家に招き入れてくれた。

老人は2人を客室に案内してソファアに座らせると、布で包まれた細長い1m程の棒の形をした物体をフィンディに受け渡した。

「フィンディ、この人は？それに何これ？」

「申し遅れました、私この村長を務めておりますストウス・ムーリトクスエです。そしてこれは我が村に代々受け継がれる鉱石の加工技術を応用して生成された剣です。」

「フフ、何で剣なのって顔をしていますねえ黒乃さん？これをこの国の最北端にある城におられる父う——魔王様に届けられればなんとあたしと黒乃さんは夫婦になるのを認めて貰えるんですよ？」

「ぶっ！夫婦！？そ、そりゃあ嬉しいけど…僕高校生だし働いてないし根暗だし引き籠りだし頭悪いし格好良くないし運動神経皆無だしえーっとそれからそれから——とにかく僕なんかじゃ無理だろう…」

どうやらフィンディが黒乃を地獄に連れて来たのは観光目的ではなく、彼を自らの夫にする為の作戦であった様だ。

だが妄想の中では男らしい黒乃でも現実では自分に自信が全く無いマイナス思考の人間である。

そんな彼の態度にフィンディは怒る所か惚れ惚れしており、ある意味2人の相性は抜群に良いのかも知れない。

>
 i
 3
 5
 3
 1
 0
 —
 4
 3
 7
 1
 <

村長の好意で2人は彼の家に泊まって行く事になり、黒乃がシャワーを浴びて部屋に戻るとベッドの上に妖艶な着物を着たフィンディが無防備に眠っている。

部屋はベッドが一つしか無い相部屋の為、必然的に2人で一緒に寝なければならぬ。

彼女を見ている内に黒乃は興奮して性的欲求が芽生え、暴走する前に何とか彼女を襲いたい衝動を抑えて部屋から飛び出しソファで眠ろうとした。

しかし何時間経ってもフィンディの姿が頭から離れず、遂に理性を失い雄の本能に目覚めた黒乃は眠っている彼女に目を閉じて口付けをしようとするが何故かあまり柔らかく無い感触だけが彼の唇に伝わって来る。

嫌な予感がした黒乃が目を開けるとフィンディが悪戯な表情をしながら人差し指で彼の唇を押えていた。

「キャハ？ いけませんよお黒乃さん？ こーゆーのは結婚してからにしましょうねえ？」

「ち、違う！ これは不可抗力で…お願いだからそんな目で見ないで…」

黒乃の欲求はフィンディによってあっさり打ち砕かれ、悶々としながら彼女と共に一夜を過ごした。

昨晚の一件で全く眠れなかった黒乃は気持ち良さそうに寝ているフィンディに少し腹を立てていたが、悪魔なのに天使の様な寝顔をしている彼女を見ていたらどうでも良くなってしまうた。

彼が暫らく部屋でぼーっとしていると村長の妻が部屋に入ってきて

フィンディを優しく起こそうとするも中々起きない。

「朝でございますよ〜?」

「んにゅ…後5分う…」

> i 3 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

村長の奥さんが腕に縊りをかけて作った朝食をご馳走になった黒乃とフィンディはお世話になった2人にお礼を言つてムーリトスクエ家を出た。

村を鼻歌を歌いながらご機嫌に歩くフィンディの後ろでは重たい剣を抱えながら黒乃は亀も顔負けの鈍さで息を荒くして歩いていると前方から村人達が悲鳴を上げて走つて来る。

その勢いで黒乃は激しくぶつかられて持っていた剣が遠くに飛んで行つてしまい、彼は剣が飛んで行つた方へ全力で向かつて行くと甲冑を来た女騎士がそれを拾つて去るうとしたので大声を張り上げて呼び止めた。

「す、すみません。それとっても大事な物なんです…返してくれませんか？」

「生憎私達も姫が大事なのでな。貴様の様な貧弱な若造にこの国の未来を託す事は出来ん。」

今までフィンディが優遇されていたのは実は彼女が魔王の娘であり、この国の未来を担う次期王位継承者となる黒乃を歓迎していたからである。

しかしこの女騎士と同じ思想を持った反対派も勿論おり、反対派は魔王の命令で剣を奪いに来るので無事に剣を魔王に譲渡するのは険しい道だろう。

そんな黒乃と女の会話の一部始終を遠くから見ていたフィンディはそれまで黒乃が見た事が無い程の恐ろしい形相をして女騎士に歩み寄った。

「ねえその剣を返して？返してくれないとあたしあなた達を殺しちゃうよ？」

「しかし姫！こんな男では——っ！分かりました。ではこうしましょう？今から2日以内にリトクビー高原に咲くブラッディリスを摘み採ってここに持って来てください。そうすれば剣をお返ししましょう。但し行くのはこの男だけ、姫は一切手伝ってはなりません。」

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

黒乃は何故花なのかと疑問に思ったが、女騎士が語るにはブラッディリリスには花言葉で“犠牲の上にある愛”という意味が込められており、それを異性に渡すのは黒乃のいた世界で言うプロポーズであるらしい。

ここまでの話なら簡単に済みそうだが、この花は見つけ出すのが大変困難で一般的に4ヶ月は掛かると言われているので2日間で見つけるのは不可能に近く実はかなり無茶苦茶な要求である。

当然女騎士もそれを知った上で要求したのは黒乃に王たる資質があるかを見極める為で、仮に見つけられなかったとしても彼の努力次第では剣を返すつもりでいる。

フィンディは終始無言で黒乃をリトクビー高原へバスで送り届け、それまで彼に見せた事の無い悲しそうな表情をして帰って行った。

「はあ…あの人の言った通り僕なんかじゃ釣り合わないよ。それにフィンディとこの国の幸せを考えたら僕は早くこの世界から消えた方が良くのかも——って何で僕はいつもこうネガティブなんだろう！こんな性格だから何をやっても駄目なんだよ！さ、時間が勿体無いし探しに行こ。」

独り言をばやきながら黒乃はブラッディリリスの写った写真と付近に生えている花々を見比べながら腰を曲げて歩き周った。

数時間探し続けて疲れ切った黒乃が芝生の上で横になって眠っていると誰かが彼の顔の前に水と食べ物を置いてそそくさと去って行ったが、それに彼が気付いたのはそれから翌日の朝である。

眩い朝日に照らされ黒乃は無駄に一日を寝て過ごしてしまった事に気付く後悔したが、悔やんでいても仕方が無いのは分かっていたので重い体を無理矢理起こして必死に探した。

>
 i
 3
 5
 3
 1
 0
 —
 4
 3
 7
 1
 <

ごつごつした岩が無造作に転がり凹凸になった地面やまるでゲームのダンジョンの世界を体感している肥沃な森などありとあらゆる場所を行ける範囲で黒乃は探索したが、似た色の花くらいしか見つけられず半ば諦めた状態だった。

しかしそんな気持ちになる度に彼の脳裏にフィンディの笑顔が過ぎり、諦める事を踏み留まらせた。

俯いて歩いていた黒乃がふと前を見るとやたら細長い耳を持った黒猫が座っており、彼の姿を確認すると突然鳴き声を上げながらまるで付いて来いとも言っているかの様に駆け出して行く。

「ま、待つてよ！はあはあ…速いつて…！」

黒猫はぴたりと動きを止め、黒乃の方へ振り返る。

そこは断崖絶壁の今にも崩れそうな行き止まりの道だったが、黒乃が目を細めて見ると向こうの崖に場違いな程綺麗に佇むブラッディリスが咲いていた。

だがそれを採るには落ちたら最期の2mの距離を飛び越なければならず、そう簡単に決心が出来る行動では無い。

ましてや今までの人生で命所か何も賭けて来なかった彼には重い選択、彼は暫らく頭を抱えて自分自身と見つめ合った。

そしてふっきれた笑みをして彼は立ち上がり、助走を付ける為に後ろへ下がる。

「あそこに生えているブラッディリスみたいにフィンディは僕じや一生届かない高嶺の花なのかも知れない——けど、君を想って死ぬるなら良いかつ！」

そう言い終えると黒乃は限界まで助走を付け向こうの崖に目掛けて高く飛んだ。

彼は無事着地しブラッディリリスを摘み取ると一気に体中の力が抜けて倒れ込む。

しかし安心したのも束の間、崖がバラバラに崩れ落ち彼は果てなく続く暗闇の中へ吸い込まれて行った。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

あれから何時間経過したのか、黒乃は病室らしき所で目を覚ました。ベッドにはずっと看病してくれていたのかフィンディが黒乃の膝元を枕代わりにして眠っており、それを見て堪らなく彼女が愛おしく思えた彼女が彼女の頭を撫でていると女騎士が入って来るなり預かっていた剣を黒乃に渡して呟いた。

「合格です。私達はあなたと姫が作り上げるこの国を見てみたいと思います。ですがこれから刺客は送り込まれて来るでしょう…それでも姫をお守りすると誓えますか？」

「うーん守れるかは約束出来ないけど…愛する事は誓います——つてね。」

それを聞いた女騎士は嬉しそうに病室から出て行った。

話声やドアが開閉する音で起こされたのか目を覚ましたフィンディは潤んだ瞳で黒乃に抱き付く。

彼女の予想外な行動に黒乃は顔を赤くしてあたふたしていると、フィンディは彼の頬を力いっぱい平手打ちした。

黒乃が驚いて彼女の顔を覗くとその瞳には大粒の涙を溜めており、溢れだしそうになる感情を必死に堪えている。

「あたしを残して勝手に死ぬうとするなんて許せません…っ！お仕置きです！」

「ちよっ、待つて？君のお仕置きだけは本当に勘弁だから！これ…これあげるから許して？」

「こんな花いらないます！今からあたしの言うお願いを全部聞いてくれたら許してあげますよお…？」

フィンディは黒乃に4つの要求をした。

1つ目、プリンを食べさせる。

2つ目、お姫様抱っこをさせる。

3つ目、デートさせる。

4つ目、村人達に聞こえる程大きく自分を愛していると叫ばせる。

彼女曰く拒否すれば、以前よりも恐ろしいお仕置きが待っているらしい。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

それから翌日、我が儘お姫様ことフィンディの脅迫紛いのお願いでこれから面倒事をしなければならぬ黒乃の気分はとても憂鬱だった。

先ず一つ目のお願いのプリンだが地獄には存在せず、黒乃のいる世界に戻って調達するか彼自身が調理するか二択しか無い。

黒乃はフィンディにバスで元の世界に行きたいと伝えたが、あっさり断られて余計に催促された。

勿論料理をした事が無い黒乃にとってはこのプリンこそが最大の壁であり、他のお願いは羞恥心さえ我慢すれば簡単に解決するので問題は無いと彼は考えている。

「あの悪魔！食べたいなら自分で探してよ！——愚痴つても始まらないし材料探しに行こ。そう言えばプリンって何で作るんだろう？どうしよう卵と牛乳と…砂糖ぐらいしか分かんない。」

フィンディから受け取った地獄の通貨を握り締めながら黒乃が村を練り歩いていると、何やら隣の建物から甘い匂いが漂って来る。

匂いに釣られるまま黒乃が建物に入ると一生懸命ロロタルが何かを掻き混ぜており、彼の視線に気付いたのか動かしていた手を止めて目をぱちくりした。

やはり勝手に入っては拙かったと思った黒乃が出て行こうとするとロロタルは彼の服の袖を掴んで捕まえた。

「お待ちくださいませ黒乃様。何かお探しでございますか？」

「えーっと…ろったん——じゃなくて君は何で僕の名前知ってるの？」

「何で、でございますか？あなた様はいつも私めを大切にしてください。さったではありませんか？」

「と、言う事はろったんもフィンディと同じで僕の妄想の記憶があるんだ。でも妄想と全然性格違うよなあ……」

そう言って黒乃は自分が妄想していた2人の性格を思い出しながら呟いた。

だがこの時の彼はロロタルの本当の性格を未だ知らない。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

本人曰く、レストランの受付嬢であるロロタルが菓子工房にいるのは職人である親戚の手伝いをしているからだと言う。

これは絶好のチャンスだと考えた黒乃は思い出せる範囲でプリンのイメージをロロタルに伝え、協力して貰って作る事にした。

それから思考錯誤の末に黒乃が作り出したお菓子はほぼプリンと言った感じなのだが、人間と悪魔の味覚が違う為に自分では味見が出来ない。

そこで彼はロロタルに味見を頼んだ。

「どう？美味しい？」

「美味しいです…！人間の皆様方はこんな美味しい物を毎日食されているのでございますか！？」

「そんなに美味しいの！？」

ロロタルは目を輝かせながら頬を抑えてそう言った。

それを聞いた黒乃も味がしないと分かった上で食べてみたくなったので、一片取って口に運んだ。

微かに味はするのだがそれは甘いと言うよりは辛く、舌がひりひりと痺れている感覚だったので本当に美味しいのか彼は疑問を持ったがロロタルが嘘を付いている様にも気を使って美味しいと言っている様にも見えなかったものでこれで一応完成になった。

「手伝ってくれてありがと。今度お礼させてね？」

「お礼、でございますか？では…目をお瞑りくださいませ黒乃様。」

「え？あぁうん…？」

その時だった、鬼の形相をしたフィンディが扉を蹴破って入ってきた。

突然の大きな音で思わず目を開いた黒乃は恐怖で腰を抜かしがたがたと震えていると、ロロタルが彼を庇う様に前へ出てフィンディを睨み付ける。

黒乃は修羅場と化したこの狭い空間に漂う殺気と威圧感を和ませようと2人の間に立って愛想笑いを振り撒くが、2人に凶器を向けられ慌ててキッチンの隅に隠れた。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

鋭い眼光で睨み合い互いを牽制しているフィンディとロロタルはいつ戦闘を始めても可笑しくは無い。

このままでは自分の大好きな2人が傷付いてしまうと恐れた黒乃は引き攣った表情でプリンをフィンディに差し出す。

フィンディはそれを黙って受け取り飲み込むかの如く一瞬で平らげると彼女の顔は見る見る内に火照て行き、舌を出しながらのた打ち回った。

「か、辛っ！水を！水をください黒乃さん！」

「ええっ！そんな筈は——まさか！？」

「その通りでございますよ黒乃様？私は少々この女狐を懲らしめ苦しんだ姿を見たかったものですから。」

今までお淑やかな態度をしていたロロタルは一変して、黒乃が日頃妄想していた超DSな性格になっていた。

彼女の残忍な微笑みは数々の殺戮を手際良くこなして来た快樂殺人者にも似ており、それを見た黒乃は危険を察して工房からの脱出を決意する。

「ここにいたら死ぬヴィジョンしか見えない——よし、逃げよう。」

黒乃は水をフィンディに渡すと一目散に工房から出て行き、助けて貰う為に村長の家へ向かった。

「ケホケホッ！こ、この泥棒猫——っ！」

「あらあら一国の姫ともあろう方がこれしきの事でお怒りになられるのですか？」

フィンディとロロタルは取っ組み合いの喧嘩を始め、工房の中は食器や生卵が飛び交って悲惨な光景になり、この後2人がこつ酷く説教を受けたのは言うまでも無い。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

(1 - 2 2)

プリン騒動から翌日、本人こそ納得はしていないもののこれで一つ目のお願ひであるプリンを食べさせる事を達成した黒乃は残り三つのお願いを全て今日中に片付けてしまおうと考えた。

彼はフィンディをお姫様抱っこする為、部屋へ呼びに行く wait 待ちましたと言わんばかりに彼女は彼に飛び乗ろうとしたが、当然受け止められる筈も無くその勢いで2人は倒れ込んだ。

黒乃の顔はフィンディの胸で圧迫され、呼吸が出来ないので床を叩いて降参の意志表示をすると彼女は体を持ち上げ、くすつと笑い彼の顔を見ている。

「な、何が可笑しいんだよフィンディ!？」

「キャハ?私の胸で興奮しちゃいましたかあ?鼻血出てますよ?は・な・ぢ?」

フィンディの言葉を疑いつつも黒乃は鼻の下を指で擦るつてみると確かに大量の鼻血が出ている。

しかも鼻血は彼の服だけでは無く彼女の着物にもべったりと付いていた。

すると彼女は何の悪巧みなのか、再び彼の顔に胸を押し当てながら色気のある声を出す。

「ほらほら黒乃さんの大好きな巨乳ですよ〜?」

「ぷはあっ!や、やめて!恥ずかしいから!本当に恥ずかしいからっ!」

口では抵抗している彼の意志に反して体は彼女の胸から離れようとはしない。

これが彼の…いや男の本能と言う物だろう。

一方、フィンディは本能等は一切無く彼の恥じらう姿を見て楽しんでいるだけのだが。

「あゝあゝ黒乃さんの鼻血で着物がびしょびしょになっちゃいましたねえゝ？どうしてくれるんですかあゝ？」

「もうやだ…家に帰ってパソコンやりたいよう…」

「だゝめゝですゝ？黒乃さんはあたしのお嬢さんになるんですからあ？」

いつも優しく微笑んでいるが何も語らず動かないカードの妄想フィンディといつも不適に笑い恐ろしい言動と行動をする現実フィンディ、黒乃は妄想の方が良いとさえこの時思った。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

鼻血塗れになりながらもフィンディが何故か面白がつて満足してくれたので二つ目のお願いであるお姫様抱っこは達成で良いらしい。

黒乃は鼻血を出し過ぎて貧血気味になりながらも次のデートを達成すべく、フィンディを連れて村へ向かった。

とは言え付き合った事は愚かデートすら経験の無い黒乃は何をすれば良いのかもどんな所に行けば良いのかも分かる筈がない。

隣で浮き浮きしているフィンディを余所に彼の頭の中は不安だらけで楽しむ余裕は全く無く、後でどう謝れば許して貰えるかしか考えていなかったが、彼女に然りげ無く手を握られてやる気が起きた。

「大丈夫ですよお黒乃さん？あたしもデートするの初めてですから？それに…黒乃さんと一緒にいられるだけであたしは幸せですから？」

「そりゃあ僕もフィンディと一緒にいれて幸——あのさ、全然話変わるけどブラッディリリスを探しに行った時に崖から落ちたのに何で僕生きてるの？それに僕が寝てる間に水と食料を置いてくれたのは君？あ、それと耳の長い黒猫も。」

あの日から疑問に思っていた事を黒乃は偶々思い出したので思い切って聞いてみた。

その理由としては彼は確かに崖が崩れて真っ逆さまに落ちて行く感覚があったのを覚えているのに擦り傷程度しか怪我をしていないし、女騎士がフィンディに協力するなど言っていたのに彼女が自分に水と食料を与えに来れる筈が無いからだ。

耳の長い黒猫に到っては黒乃をブラッディリリスの所まで案内してくれている。

「もゝ話変わり過ぎですよ黒乃さん！あたし達が迎えに来た時には黒乃さん木に引っ掛かって降ろすのとっても大変だったんですよ？」

「へえ…じゃあ水と食料は？」

「あたしも黒乃さんに届けたかったですけどお残念ながら…きつとあの泥ぼ——ロロタルが置いてくれたんじゃないですかねえ？で、耳の長い黒猫ですかあ？この地獄には猫ちゃんはいませんよ黒乃さん？見間違いか錯覚ですねそれは？」

フィンディに全ての疑問を答えて貰ったが正直どれも釈然としない答えばかりで余計に黒乃の心のもやもやが広がってしまった。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6455y/>

悪魔でもバスガイド

2011年11月25日04時01分発行